

Artist Index【アーティストインデックス】



絵画 相川 みつぐ Mitsugu Aikawa

線の持つプリミティブな力を引き出し、図形を構成要素として寓話的な世界を描く。印象的な図形で表現された自然と、対照的なモチーフが織りなす情景はまるで物語。過去から未来へ続く普遍的なイメージを通し、人間と自然との関係性を深く探求。規則性のある力強い背景と、滑らかなモチーフの絶妙なバランスが魅力。特徴的な森の表現は、全体像と細部のタッチと色彩により奥行きある世界観を創出する。1976年生まれ、札幌在住。北海道造形デザイン専門学校卒業。札幌国際芸術祭参画、JRタワー ARTBOX 展示など実績は多彩。店舗壁画や絵本、装画等も幅広く手掛ける。壁画制作などの依頼にも応じる。



サクソ 伊藤 元直 Motonao Ito

秋田県出身。北海道大学ジャズ研究会での活動を機に演奏を始め、故郷福居良氏、福居良則氏に師事し、ジャズの道を深化。Sapporo Jazz Ambitious (SJA) プロジェクトでは、渡辺貞夫氏や David Matthews 氏ら著名音楽家との共演を果たし、実力と経験を蓄積。現在は札幌市内のライブハウスを中心に、自己のオリジナル楽曲中心のライブ活動を展開中。師事した巨匠たちから受け継いだ確かな技術と現代的な感覚を融合させた演奏スタイルが特徴。そのライブパフォーマンスは、楽曲の持つ世界観を深く表現し、聴衆を魅了し続ける。北海道のジャズシーンを牽引する一人。



オーボエ 岩崎 弘昌 Hiromasa Iwasaki

国立音楽大学卒業と同時に札幌交響楽団に入団。1987年にドイツのハンブルク国立歌劇場管弦楽団で研鑽を積み、帰国後は札幌のオーボエ首席奏者及びソリストとして活躍。長年にわたり札幌の顔として演奏活動を牽引し、その温かく深みのある音色で多くの聴衆を魅了。定年退団後は、「いつでもどこでも音楽を」をコンセプトにNPO法人奏楽（そら）を立ち上げ理事長となる。現在も道内外各地にて若手音楽家と共に音楽を通じた社会貢献活動を精力的に続ける。



ガラス作家 上杉 高雅 Takamasa Uesugi

1979年札幌市生まれ。東京国際ガラス学院を卒業後、2001年に「Studio π glass factory」を設立。2005年からは故郷の札幌を拠点に活動。主に笛吹き技法を用い、一瞬の呼吸でガラスに命を吹き込む「かけがえのないものづくり」を信条とする。2013年にはリキッドガラスキャンドルが札幌スタイルに認証されるなど、その感性は多方面で高く評価されている。近年も2024年の個展「空から来て 空を見る」をはじめ、精力的に発表を継続。美術と工芸の境界を軽やかに飛び越え、自然や生活との対話から生まれる作品は、使い手の日常に深い思索と静かな彩りを与え続ける。



家具デザイン・製作 梅原 紳一郎 Shinichiro Umehara

1977年札幌市生まれ。建築学を修め、輸入家具店を経て「北の住まい設計社」で製造を学ぶ。2012年に「北風 works」を創業、2022年に法人化した。建築に憧れた日々を経てたどり着いたのは、幼い頃に夢見た家具職人の道。衣食より「住まうこと」への探究心が強く、一着を長く愛用する実直な人となりが作風にも表れる。幼少期よりプロテスタントの教会学校で聖書の価値観に触れて育ち、普遍性や永続性の具現化を志し製作に邁進する。ただ、本人はそれを高尚に語るのを好まない。シンプルにスマートに、優しく温かく。そんな家具づくりを願う純粋な想いを携え、日々、静かに木と向き合っている。



ピアノ 太田 彩寧 Ayane Ota

新潟中央高校音楽科ロシアメソッド専攻、北海道教育大学岩見沢校卒業。ピアノを馬場久美子氏、師岡雪子氏、松永加也子氏に、室内楽を長岡聡季氏、廣野亮氏に師事。高校在学中からモスクワ音楽院教授陣や藤井一興氏のレッスンを受講し、大学ではソロ・室内楽ともに選抜演奏会に出演。現在はピアノ講師として後進を指導する傍ら、伴奏や訪問演奏など幅広く活動を展開している。クラシックに留まらない柔軟な感性と、アンサンブルで培った対話の音楽性が魅力。真摯な情熱を胸に、多様なステージで美しい旋律を響かせる期待のピアニスト。その一言一音に宿る深い響きが、聴く者の心に寄り添う。



バイオリン 太田 楽 Gaku Ota

北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学科卒業。バイオリンを土方恭之氏、長岡聡季氏らに師事。大学在学中にソロ選抜演奏会や卒業演奏会に選出されるなど、早くから頭角を現す。現在は札幌アルカディア室内管弦楽団のコンサートマスターを務める傍ら、エルム楽器や個人レッスンでの指導にも注力。オーケストラへの賛助出演や訪問演奏など、演奏と指導の両立に情熱を注ぐ。南区をはじめ地域に根ざした活動を大切に、確かな実力と人望で多くの信頼を集める新進気鋭のヴァイオリニスト。その瑞々しくも安定した音色は、聴く者の心に寄り添い、音楽の喜びを広く、深く伝え続けている。



シンガーソングライター・ギタリスト 沖野 光宏 Mitsuhiko Okino

1978年に「おーみ楽園（がくえん）」を結成し、1981年にはハッピーフォークフェスティバル北海道地区大会で優勝。その後はさまざまなジャンルの演奏サポートや、朗読、絵本の読み聞かせ、紙芝居などとのコラボレーションを手がけ、BGMやサウンドトラック制作も行うなど、活動の幅を広げる。アコースティックサウンドを基とし、現在は2005年結成のギターデュオ「ゆうみつ」、2019年結成の「やるめる」といった個性豊かなユニットで活動中。ジャンルを超えた柔軟な音楽性は多くの人を魅了している。2025年にやるめろでCD「時は色づく」をリリース。



映像 目見 祐介 Yusuke Katsumi

北海道在住。Webプロモーション業務から映像制作に関心を持ち、学びを深める。2023年に独立し、現在はWebプロモーションと映像制作を個人で手掛けている。彼の制作スタイルは、単に作品を完成させるだけでなく、その後の発信や活用方法まで一貫してサポートする「伴走」を重視している点にある。また、京極町の地域おこし協力隊としても活動しており、地域の魅力や人々の日常を映像で記録し、積極的に発信することで、地域社会に貢献している。映像を通じて、Webプロモーションの知識と地域への愛情を融合させた独自の表現を追求するクリエイターである。



一級建築士 上遠野 克 Koku Katono

株式会社上遠野建築事務所代表。武蔵野美術大学造形学部建築学科を卒業後、F設計計画事務所を経て1979年に上遠野建築事務所に入所し、現在は代表を務める。日本建築家協会北海道支部などに所属し、地域社会の文化的風土を尊重しながら、積雪寒冷地である北海道に適応し、時間とともに成長していける建築を目指す。単に社会的・機能的・技術的条件を解決するだけでなく、周辺環境を含めた調和を重視する姿勢が魅力。代表作は、北星余市高等学校、北星学園大学の各施設、北海道カトリック学園 認定こども園カトリック聖園こどもの家など。



建築家 上遠野 徹 Tetsu Katono

1924年函館市生まれ。福井高等工業学校を卒業。竹中工務店を経て1971年に上遠野建築事務所を設立。一貫して追求したのは、北海道の厳しい気候風土におけるモダンズム建築のあり方。その結実ともいえる「自邸」は、2003年に DOCOMOMO100選に選出されるなど、歴史的・文化的な評価も極めて高い。酪農学園大学などの文教施設も数多く手掛け、第1回北海道建築賞を受賞。日本建築家協会北海道支部長を歴任するなど、北の建築界の発展に大きく寄与した。2009年に逝去。北国の風景の中に、洗練されたモダンズムの種を蒔き、現代に至る建築文化の礎を築いた偉大な足跡は今も色あせない。



インスタレーション 河口 真哉 Shinya Kawaguchi

札幌在住の詩人・インスタレーション作家である。2016年より活動を開始し、新北海道美術協会会員として、個展・グループ展に多数出展している。活動の核となるのはオリジナルの詩で、これを映像、音響、照明、オブジェと融合させた空間アートを展開する。日常の風景を切り取りながら、そこに「違和感」を意図的に持たせることで、鑑賞者の記憶や記録に深く問いかけるのが作風の特徴。経歴に加え、詩を核とした多感覚的な表現、そして日常への鋭いまなざしと問題提起によって、独自の芸術世界を構築し続けている。



絵画 河口 真由美 Mayumi Kawaguchi

北海道教育大学岩見沢校卒業。現在は北海道美術協会会員として、札幌を拠点に精力的な活動を続ける。身近な出来事や動植物をモチーフに、独自の色彩とリズムを用いた抽象表現で描き出す油彩画家。その卓越した感性は高く評価され、第96回道展での北海道美術協会賞受賞をはじめ、アートプラネット・ラスト展での準グランプリ獲得など、輝かしい実績を誇る。札幌を中心に個展やグループ展を多数開催し、雑誌などのメディアでも注目を集める。写実を超え、キャンパスに定着された生命の息吹や心象風景は、観る者の感性を鋭く刺激する。



ダンス 菊澤 好紀 Yoshinori Kikuzawa

1978年生まれ。踊る大工・舞道家、リトリート施設「sola」代表。22歳でカポエイラに出会い、大工として働きながら海外でダンスを学ぶ。舞踏やストリートダンスを融合した独自のスタイルを確立し、書道と舞による表現やアイヌ民謡との共演など国内外で多彩に活動。2025年には韓国で延世大学教授との共演を果たす。2022年には空沼岳の麓に自ら施設を建築し、自然とアートによる癒やしの場を創出している。大工とダンス。手法は異なるが、どちらも「人を幸せにする」という目的は同じである。自然豊かな南区の環境を愛し、生命の躍動と静寂を即興の動きに込めて、観る者の心に深い響きを届ける。



映像 北川 陽稔 Akiyoshi Kitagawa

札幌市出身の映像作家・haptics.inc 代表。東京を拠点に活動後、近年はランドスケープや植物をモチーフにした写真・映像作品を制作し、環境の多層性・多様性を探究している。国内外で評価され、2023年 International Photography Awards、2022年 Tokyo International Foto Awards などで入賞。また、映像分野でも札幌国際短編映画祭で2023年・2022年連続入賞の実績を持つ。2011年にはキャン/写真新世紀で佳作を受賞するなど、若手時代から注目され、写真と映像を行き来しながら新しい表現を追求している。



ワークショップ 札幌市立大学 きほんのきのかい KihonnoKinoKai

札幌市立大学を拠点に活動する「きほんのきのかい」。デザインの「きほんのき」をキーワードに、学生たちが講義の枠を超え、実践を通じて学びを深める機会を創出している。イベントの企画運営や具体的なデザイン活動を通じ、理論を現実の形へと昇華させるプロセスを重視。地域社会や他者との関わりの中で、デザインの本質的な役割を肌で感じながら成長を続けている。ただ「作る」だけでなく、そこに介在するコミュニケーションや、物事の根幹を見つめ直す姿勢を大切に。未来のクリエイターたちが、楽しみながら真摯にデザインと向き合うための、熱意あふれるプラットフォームとして機能している。



美術
小助川 裕康 Hiroyasu Kosukegawa

1978年札幌市生まれの造園彫刻美術家。シャープペンシル画や壁画制作を経て、現在は「造園」という人工自然を舞台に、樹木の生と死を見つめる空間作品を制作する。ランドスケープをキャンパスに見立て、人との関わりで育まれ風化する作品は、場所と一体となり深い思索を促す。単なる造形に留まらず、自然と人の関係を問い、時の流れそのものを表現。また「人々HITOBITO」を主宰し、アートを通じた交流の場を創出する活動家の一面も持つ。日常の風景に新たな視点を提示し、生命の循環と時の美しさを静かに語りかけるその作風は、観る者を未知の感覚へと誘う。



バイオリン
小林 佳奈 Kana Kobayashi

北海道教育大学札幌校芸術文化課程音楽コースを卒業後、2002～2003年にノルウェーグループアカデミーに留学。確かな技術と国際的な視点を培う。2006年と2010年には、世界的な音楽祭であるパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）に参加し、その実力を国内外に示してきた。現在は、ソロ活動をはじめ、カルテット・ポピョやアンサンブルグループ奏楽（そら）のメンバーとしても活躍。室内楽、オーケストラなど多岐にわたる演奏活動を展開する一方、後進の指導にも情熱を注いでいる。地元・南区真駒内を拠点に、クラシック音楽の魅力を精力的に発信し続ける。



アーティスト・映像作家
小林 大賀 Taiga Kobayashi

1986年生まれ。札幌市立高等専工芸デザイン科卒業。2012年には米国西海岸を自転車で縦断しながら作品制作を行う。2015年よりアートプロジェクト運営に携わる。近年は北海道の助成を受け、メキシコのエル・コレヒオ・デ・メヒコ客員研究員として約1年間の滞在を経て帰国。現地のシャーマニズムを追った長編ドキュメンタリー「巡礼の季節 - ヒクリ、8000と20年」は、国内外の映画祭で受賞した。



技術士（都市及び地方計画）
斉藤 浩二 Koji Salto

ランドスケープデザイナー。（株）キタバ・ランドスケープ代表。技術士（都市及び地方計画）、東京農業大学客員教授など多数の役職を歴任。1975年東京教育大学大学院教育学研究科美術学専攻修士課程修了。造園設計事務所を経て、1985年キタバ・ランドスケープ・プランニング設立。イサム・ノグチ逝去後のモエリ沼公園ランドスケープデザインを担当し、同公園の設計監理でグッドデザイン大賞、土木学会賞を受賞。その他、マオイの丘公園、SEIYO しんえい四季のまちなどの設計に携わる。1997年石山緑地の設計で日本造園学会賞を受賞するなど、受賞歴多数。安平町生まれ、札幌市育ち。



サウンドアート
嵯峨 孝子 Takako Saga

音楽と朗読のユニット「野花南（w/ 嵯峨治彦）」として、全国でライブ活動を展開。朗読、ギター、5弦・15弦カンテレなどの演奏に加え、2020年よりサウンドアートパフォーマンスを開始。サウンドアート映像作品「おしらさま」は、あいち国際女性映画祭2022コンペティションアニメーション部門観客賞受賞、New York Japan CineFest2023 招待上映。民話や文学作品から、楽曲に合わせた描写やメッセージ動画まで幅広く制作。言葉とアートを融合させ「語りながら砂絵を描き続ける」という、唯一無二のライブパフォーマンスを行う傍ら、舞台美術やMVへの映像提供も手掛ける。



馬頭琴・喉歌
嵯峨 治彦 Haruhiko Saga

モンゴルの弦楽器「馬頭琴」と一人二重唱「喉歌」（ホーミー等）を演奏。ゴビ砂漠の馬頭琴奏者Y.ネルグイ氏（モンゴル国第一文化功労者）から後継指名を受け、伝統の継承に取り組む。その一方で、RAUMA、野花南、おおたか静流とASIAN WINGSなどのユニット活動や、朗読、演劇、ダンスといった異ジャンルとの共演にも積極的。ポップス、クラシックなどジャンルを超えた音楽との共演や、舞台作品とのコラボレーションなど幅広い活動を展開している。松任谷由実、鼓童、井上鑑ほか、多数のレコーディングに参加しており、伝統を重んじつつも常に新しい表現を追求する意欲的な姿勢が魅力である。



陶芸家
坂田 真理子 Mariko Sakata

真駒内柏丘のアトリエ吉兆窯・gallery 麒麟の森を拠点に、陶芸、造形など、幅広いジャンルで創作活動を展開。陶芸は、加藤唐九郎の茶碗に魅了されたことをきっかけに開始。アフリカ・ヌバ部族の絵入り顔作りで創作活動を展開。陶芸は、加藤唐九郎の茶碗に魅了されたことをきっかけに開始。アフリカ・ヌバ部族の絵入り顔作りに触発され、ペルソナやオブジェの制作にも力を入れる。また、ファンも多いというアーティストチックな料理も手掛け、芸術を日常に落とし込むその自由な発想と、人生をまるごと楽しむようなクリエイティブな姿勢が、作品にも色濃く反映されている。多彩な活動を通じて、アートの可能性を広げ続ける。



ランドスケープ
佐藤 潤子 Junko Sato

ランドスケープデザイナー。学生時代に「NPO法人アートチャレンジ滝川」（2022年解散）に参加し、その縁で恩師と出会い2007年（株）キタバ・ランドスケープ入社。主任技師。厚別山本公園や安平町立早来学園などの全国各地の公共空間（公園・広場・建築外構）、民間の庭園・宿泊施設・観光施設のランドスケープデザインを手がける。また、まちづくりやコミュニティ形成、景観整備にも取り組み、土地の個性や暮らしに根付いた持続可能な風景づくりを目指す。養蜂を通して、札幌のまちの魅力づくり、緑の創出を目指すNPO法人サツポロ・ミツパチ・プロジェクト理事。



カンテレ
佐藤 美津子 Mitsuko Sato

日本カンテレ友の会会長。カンテレ歴30年、フィンランド渡航歴は20数回に及び第一人者。2000年から毎年現地のキャンプで研鑽を積み、2024年5月の「カンテレ国際コンクール」では見事特別賞を受賞。奏者、指導者、作編曲家として多岐にわたり活躍する。現在はライズ音楽院講師を務める傍ら、アンサンブル“みゅう”を主宰。2枚のアルバムも好評を博す。オカリナやアイヌ伝統楽器トンコロとの共演も多く、その音色は聴く者を深く癒やす。北欧の伝統を胸に、道内を拠点としてカンテレの魅力を広めるべく、今日も優しく澄んだ音色を響かせている。



津軽三味線
忍 絃音 Shione

佐々木忍弥を筆頭に札幌で設立された津軽三味線団体、忍絃音“SHIONE”。芸道の理念「守・破・離」を掲げ、伝統の継承と進化に情熱を注ぐ。2024年の「津軽三味線日本一決定戦団体りんごの部」準優勝を経て、翌2025年にはついに全国優勝の栄冠を勝ち取った。この快挙は、個々の技術研鑽とたゆまぬ努力が結実した結果であり、団体の確かな成長を証明している。伝統への敬意と未来への挑戦を両立させるその演奏は、聴く者の心に深く響き、三味線の新たな魅力を国内外へ発信し続けている。北の大地から次世代の音を紡ぎ、地域文化を牽引する存在として、さらなる飛躍が期待される。



俳優／アーティスト
柴田 智之 Tomoyuki Shibata

俳優、アーティスト、作業療法士。札幌の森にアトリエを構え、福祉と創作の兼業を続けている。2000年より絵画・陶芸、楽曲制作、身体表現、戯曲の演出・出演など多角的な活動を展開。2006年の若手演出家コンクール最優秀賞や、2025年のTGR大賞・俳優賞など受賞歴も多い。2019年からは創作活動を抑え作業療法士資格を取得。2022年の合格を経て活動を再開し、現在は年齢や障がいの有無を問わない創作活動を道内外へ広げている。若手県野田村への招聘や一人芝居ツアー、ジョブキタ北八劇場での主演など、ひとつの役割にとらわれず、生と表現の場を耕し続けている。



一級建築士
鈴木 理 Makoto Suzuki

1968年札幌市生まれ。1994年北海道大学大学院工学研究科建築工学専攻修了後、建築設計に従事。2003年に一級建築士事務所鈴木理アトリエを開設、2007年に法人化。現在は株式会社鈴木理アトリエ一級建築士事務所代表取締役。東海大学などで建築設計の非常勤講師も兼務。日本建築家協会会員。主な受賞歴に、2012年グッドデザイン賞（「500m美術館」）、2015年グッドデザイン賞（「札幌三井JPビルディング」）、2016年第1回JIA北海道建築大賞 大賞、日本建築家協会優秀建築100選（「ときわの家」）、2022年第5回北海道建築デザインアワード優秀賞など多数。



一級建築士
大田 司 Tsukasa Daida

日本建築家協会登録建築家。1971年神奈川県生まれ。明治大学理工学部建築学科卒業後、石本建築事務所を経て、2007年に DAIDA DESIGN STUDIOを設立。断熱施工技術者認定登録や2級福祉住環境コーディネーター資格も保有。2020年に HakuVillas で「THE ARCHITECTURE MASTERPRIZE」WINNER、「IDA Design Awards」Bronze賞、「Japan's Best Golf Hotel 2020」[WORLD SKI AWARD 2020] 最優秀賞、2023年に蘭越の高楼で「THE ARCHITECTURE MASTERPRIZE」特別賞、「いい家オブザイヤー」3位を受賞。



東海大学教授
田川 正毅 Seiki Tagawa

日米の建築設計事務所を経て、2000年から北海道東海大学（現・東海大学）へ。2025年度まで同大国際文化学部教授。博士（工学）。一級建築士。専門はこども環境学、建築計画、都市環境。著書に「屋根のある公園 思いきり遊びたい全天候型の遊び場」（明文社・2026年）、「住まいの百科事典」（丸善出版・2021年、分担執筆）等。旭市総合計画審議会、札幌市景観審議会、小樽市景観審議会、ニセコ町都市計画審議会専門委員等を歴任。公益社団法人こども環境学会理事。公益財団法人札幌市公園緑化協会評議員。理論と実践の両輪で、健やかな居住環境の実現に向けた提言を行っている。



ドラム
舘山 健二 Kenji Tateyama

釧路市出身。4歳でオルガンを始め、ビートルズやベンチャーズに影響を受け11歳でドラムを始める。中学・高校では吹奏楽部で活動し、北海道大学JAZZ研究会を経て渡米。New York Drummers CollectiveでMichael Lawren 氏、Duduca Da Fonseca 氏らに師事し、専門的なスキルを磨く。現在は奥野義典カルテット、David Mathews&札幌ジャズアンビシャス、椿サロントリオなど、多数のバンドで精力的に活動を展開。北海道打楽器協会会員。クラシックからジャズ、ロックまで幅広い音楽的背景を持つ、北海道を代表するドラマーの一人。



民族笛奏者
樽石 麗子 Reiko Taruishi

世界各地の民族笛を操る民族笛奏者。日本（篠笛・真笛）、南米（ケーナ）、ベトナム（サオ）、インド（パンスリ）、中国（笛子）、アメリカ（クリスタルフルート）など、多彩な笛を演奏し、世界の音色を届ける。1998年にフルート演奏活動を開始し、2006年には日本クラシック音楽コンクール全国大会に入選。2016年からは世界の民族笛演奏活動を開始し、2008年からは合唱サークル、民族笛の指導も行うなど、多方面で音楽の楽しさを伝えている。現在は「やるめろ」[笛木箱]を結成して活動中。2025年やるめろでCD「時は色づく」リリース。

建築家
照井 康穂 Yasuo Terui
 1967年大阪府生まれ。1992年北海道大学工学部建築学科卒業後、竹中工務店を経て建築家圓山彬雄氏に師事、2007年に照井康穂建築設計事務所を設立。2015年より北海道科学大学非常勤講師。札幌市文化財保護審議会委員、日本建築家協会北海道支部副支部長など、地域建築界にも貢献する。受賞歴は、「浦河フレンズ森のようちえん」でのウッドデザイン賞2024最優秀賞（農林水産大臣賞）、第35回赤レンガ建築賞、第47回北海道建築賞など多数。北方系住宅専門委員として北海道の環境と住まいを深く探求。著書も共著で多数刊行。地域に根差し、教育・研究活動にも熱心に取り組む。

造形作家
内藤 満美 Mami Naito
 北海道教育大学若見沢分校美術科彫刻研究室卒業。30年以上にわたり真摯に彫刻制作を続ける。舞踏家・菊澤好紀氏をモデルとした彫刻作品を手掛け、同作品は2023年度（第77回）全道展において会友賞を受賞。この評価を経て全道展会員に推挙されるなど、長年の探求が結実した。また、南区アートシーズン「フォークロアの音と形」での作品展示は自身の大きな意欲向上につながり、ここで得た出会いやインスピレーションを糧に、さらなる創作活動を続けている。

東海大学教授・家具デザイン
中尾 紀行 Noriyuki Nakao
 1968年大阪府生まれ。専門は家具デザイン。京都市立芸術大学大学院時代、巨匠ハンス・ウェグナーの作品に深い感銘を受け、家具職人としての道を志す。1999年からは北海道東海大学旭川キャンパスで教鞭を執り自らも学生と切磋琢磨しながら製作に励むなど、教育者として両方の顔を持つ。1996年の「京都デザイン大賞」大賞をはじめ、「暮らしの中の木の椅子展」最優秀賞などの受賞歴を持つ。近年は町立中学校の家具デザインや、東日本大震災の被災児へ椅子を贈る「希望の君の椅子」プロジェクトにも参加。北の大地から、使う人の心に寄り添う社会的なモノづくりを続ける。

チェロ
中島 杏子 Kyoko Nakajima
 東京藝術大学器楽科チェロ専攻を卒業後、ドイツのケルン音楽大学アーヘン校で修士課程を修了。音楽への探求心は尽きることなく、パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）には2003年、2004年と2年連続でアカデミー生として参加するなど、国際的な経験も豊富だ。2010年からは、音楽活動の拠点を札幌に移し、地域に根差した活動を精力的に行っている。現在は、エルム楽器講師、札幌大谷大学音楽学部非常勤講師として、次世代の音楽家の育成にも情熱を注いでいる。その温かい人柄と確かな技術で、多くの生徒やファンから支持を集める、札幌を代表するチェリストの一人。

家具デザイナー
中村 昇 Noboru Nakamura
 1938年恵庭市生まれ。大工の祖父に憧れ幼少期からものづくりを始める。1969年にスウェーデンへ渡り、家具学校や国立芸術工芸デザイン大学で研鑽を積む。1973年からイケアの専属デザイナーとして活躍。世界的なロングセラーとなった名作椅子《ポエング》やソファ《クリッパン》などを世に送り出した。1978年に帰国後は、札幌に拠点を置き「ファニチャーデザインナッカ」を設立。カンディハウスや富士ファニチュア等から数多くの作品を発表し、北欧の美学と日本の技術を融合させ続けた。2023年に逝去。氏が手掛けた椅子は今も世界中の家庭で愛され、静かに人々の生活に寄り添っている。

津軽三味線
忍弥 Niya
 北海道虻田島出身。7歳で三味線を始め、佐藤俊彦氏に師事。2013年「津軽三味線日本一決定戦」優勝、2019年には自作曲で合奏日本一に輝くなど国内外で高く評価される。比叡山延暦寺での奉納演奏や、世界13カ国での公演を通じ伝統音楽の魅力を発信。古典の技と革新的な精神を併せ持ち、ジャンルを超えた共演にも積極的に挑戦している。三味線の新たな可能性を切り拓くその姿勢は、北海道を代表する表現者として異彩を放ち、後進の育成にも尽力する。次世代を牽引する情熱的な演奏は、聴く者の魂を揺さぶり、北の大地から世界へと力強い響きを届け続けている。

映像作家
早川 渉 Wataru Hayakawa
 映画監督、CMディレクター。名古屋で生まれ、青春時代を札幌で過ごした背景を持つ。1998年、処女長編映画「7/25【nana-ni-go】」がカンヌ国際映画祭に選出され、その才能が世界的に認められた。CMディレクションにおいても、「登別くま牧場」や「セイコーマート」など、地域に根差した親しみやすい作品を多数手掛け、幅広く活躍している。現在は、東海大学札幌キャンパスにて、後進の指導にも情熱を注いでおり、北海道を拠点に活動するクリエイターとして、未来の才能育成にも尽力している。

木彫り家・トンコリ奏者
福本 昌二 Shoji Fukumoto
 札幌市生まれのトンコリ奏者、製作者、木彫り家。1970年生まれ。2002年に釧路でトンコリの音色に魅了され、独学で伝統曲を習得。現在では、自ら制作したトンコリで作曲・演奏活動を国内外で展開している。アイヌアートプロジェクトに所属し、バンドではパーカッションも担当するなど、多彩な顔を持つアーティスト。その活動からは、伝統への深い敬意と、新たな表現を追求する情熱を感じる。

写真家
前澤 良彰 Yoshiaki Maezawa
 1960年京都府生まれ。高校時代に抱いた北海道への憧れを胸に20歳で移住。南区に住んで35年以上。1982年の個展以来、一貫してカメラという機械を通じて表現を追求。かつては数十点を合成する技法で細部まで写し出す一方、現在は「写りすぎない」ピンホールカメラの幻想的な世界に惹かれている。2023年の個展「未視感／既視感」や、2025年の展示「fleeting landscape」など発表も精力的。再開発が進む真駒内駅周辺の街並みを、単なる記録を超えた作品として残す試みに注力する。レンズ越しの風景に閉じ込められた時間と空間を、静かに、そして深く見つめ直す。その真摯な眼差しは、今も新たな表現を切り拓き続けている。

ピアノ
前田 朋子 Tomoko Maeda
 北海道教育大学札幌校芸術文化課程音楽コース卒業、同大学大学院修士課程修了。札幌市民芸術祭新人音楽会、Kitaraのサマコンサート、三岸好太郎美術館ミニリサイタルに出演。在学中より管弦楽器、声楽、合唱などの共演ピアニストとしても積極的な演奏活動を行い、Kitaraのスプリングコンサート、札幌市民ローコンサートなど数多くの演奏会に出演。現在、アンサンブルグループ奏楽（そら）のメンバーとして道内外各地で演奏活動を行うほか、北海道教育大学札幌校にて後進の指導にあたっている。

詩人・文芸
三角 みづ紀 Mizuki Misumi
 鹿児島県生まれ。東京造形大学在学中に現代詩手帖賞を受賞し、その後、第1詩集で中原中也賞、第2詩集で南日本文学賞と歴経新鋭賞を受賞。さらに第5詩集では萩原朔太郎賞を受賞するなど権威ある賞を数多く受賞している。現代詩を代表する詩人。受賞歴だけでなく、詩の魅力を広く伝える朗読活動にも精力的で、国内外の多くの国際詩祭に招聘されるなど、その活動の場は多岐にわたる。代表詩篇はアメリカ、韓国、フランスをはじめとする各国語に翻訳され、国際的な評価も高まっている。2017年からは札幌市に移住し、新たな創作活動を展開している。

美術
八子 直子 Naoko Yako
 恵庭市出身。北海道教育大札幌校で美術工芸を学んだ経験が、作家としての創造性の土台になる。長年にわたり北海道の文化芸術振興に貢献し、2019年第29回道銀芸術文化奨励賞を受賞。近年はスウェーデンや大阪など国内外に活動の場を広げる。2022年令和4年度北海道文化奨励賞を受賞。キャリア初期の1998年には古瀬キヨ記念北海道女流選抜展にて古瀬キヨ記念大賞を受賞するなど確かな実績を持つ。北海道を拠点とする作品は、地元への深い愛着と、美術工芸の技術に裏打ちされた繊細さ、新しい表現への飽くなき探求心に満ち、見る者の心に静かな感動をもたらす。

ベース
柳 真也 Masaya Yanagi
 愛知県出身のベーシスト。大学でエレキベースを始め、後にウッドベースに転向。故市ノ瀬美音氏に師事し、名古屋で演奏活動を本格化。2004年に札幌へ活動拠点を移す。2014年より「札幌ジャズアンビシャス」に加入し、活動の幅を拡大。確かな技術と表現力でサイドマンとして多くのレコーディングに参加。また、柳真也名義で「Sunshine&Leaves」「Sirius〜シリウス〜」（2018年）、「Fair Weather」（2021年）をリリースするなど、リーダーとしても精力的に活動する。ジャズへの深い愛情を音色に込めて活動する、注目のベーシスト。

版画・彫刻・アイヌ音楽
結城 幸司 Kouji Yuuki
 釧路市出身。2006年から南区石山に在住し、版画や木彫りを中心に現代アートの制作活動を行う。東京で約10年間サラリーマンを経験後、ネイティブアメリカンの本との出会いをきっかけに、アイヌ活動家だった父・結城庄司の本を読み、創作の道へ。アイヌ伝統文化と現代アートの融合を目指す「アイヌアートプロジェクト」を立ち上げ、代表を務めるほか、音楽活動も行うなど、多岐にわたる表現活動を通して、そのルーツと現代を結びつけている。

染色家
米坂 豊樹 Toyoki Yonesaka
 1977年東京造形大学テキスタイルデザイン専攻卒業。染色工房米坂を主宰。主に型染や色糊を用いた捺染という緻密な技法を駆使し、独自の布の世界を追求し続けている。その確かな手仕事は国内外で高く評価され、2017年にはサンフランシスコ州立大学にて個展を開催。その後も札幌市民交流プラザでの展示や「JTCテキスタイル未来展」など、精力的な発表を続ける。長年培った感性は、布という素材の枠を超え、空間そのものを鮮やかに塗り替える力を持つ。伝統的な染めの技法に現代的な息吹を吹き込み、日常に彩りを添えるべく、日々創作に情熱を傾ける。

家具デザイン・製作
621 Roku-Ni-Ichi
植木 祐介 祐川 諭 藤原 誠
 Ueki Yuusuke Sukegawa Satoshi Fujiwara Makoto
 デザイナーの植木祐介、祐川諭、職人の藤原誠による3人組ユニット「621（ロクニーイチ）」。札幌を拠点に家具やプロダクトのデザインから制作までを一貫して手掛ける。大学時代の同級生である彼らは、当時からジャンルを越えた活動を共にし、「日常的でありながらどこか新しい」を追求している。オリジナル家具のほか、建築家からの依頼による特注家具や什器などを製作。2014年の結成以来、雑誌・専門誌などへの掲載、また新作椅子の展示・企画など活動範囲を広げている。